

2025年度311ゼミナール第7期

被災地実情班

「山元町における被災の記憶」

報告書



M2年 佐藤駿

2年 大久保奏亮

2年 千葉雄翔

2年 築場麻花

4年 五十嵐真子

2年 高木那々実

2年 西美紗緒

1年 佐々木優衣

4年 高橋輝良々

2年 千葉奈々子

2年 福岡加彩

1年 中村玲菜

目次

はじめに	01
2025年度活動計画	02
中浜小学校の被災体験	03
①視察の概要	
②中浜小学校の避難の概要	
③3月11日の「5分間」に至るまで	
④マニュアルを越えた「垂直避難」の決断	
⑤校舎が語る津波の物理的脅威	
⑥屋根裏倉庫での生存維持と備えの重要性	
⑦当日の時系列	
⑧中浜小学校視察についての総括	
常磐山元自動車学校の被害に向き合う	04
①視察の目的と背景	
②常磐山元自動車学校の避難	
③早坂さんご夫妻への質疑応答	
④常磐山元自動車学校視察についての総括	
山元町視察の総括	05
ゼミ生振り返り	06

被災地実情班について

私たち被災地実情班は、東日本大震災の実情に向き合い、被災地と被災者の思いを共有することを目的に、現地に出向いて、被災経験者から聴き取りをすることを基本にしている。

2020年度第2期から、宮城県石巻市の牡鹿半島をフィールドにし、現地の方へのインタビュー調査や現地の視察を行ってきた。23年度までの活動で旧牡鹿町の小湊浜地区、鮎川地区、石巻市門脇町地区の被災当時の状況や復興過程での出来事などを聴き取り、3冊の記録集として刊行した。

24年度には、雄勝保育所園児で被災したメンバー小山七海さんの被災経験・教訓を共有するため、雄勝小学校を訪ね、当時の教員清水博志先生とともに避難路を歩き、学校避難の教訓を学んだ。さらには人口減少が続く雄勝地区の復興の行方についても関係者の聴き取りを進め、震災からの学びを深めた。

いずれも活動報告書として詳細をまとめ、仙台防災未来フォーラムなどの機会に、成果を共有している。

活動のテーマ

「震災当時を追体験し、
具体的に知り、後世に伝える」

今期は視察調査地域を山元町に定めた。

山元町を視察調査の対象にしたのは、「3.11メモリアルネットワーク」代表理事であり、2024年度まで宮城教育大学「311いのちを守る教育研修機構」の統括プロデューサーを務められていた武田真一氏の「常磐山元自動車学校事件について、十分に知られていない現状が悔しい」という言葉がある。この発言をきっかけに、同事件の体験とそこから得られる教訓を共有し、記録として残す必要性を強く感じたためだ。

山元町を含む仙南地区の被災は、東日本大震災において全国的に十分認知されているとは言い難い。その犠牲に向き合い、被災の事実をあらためて見つめ直すとともに、中浜小学校や常磐山元自動車学校における避難の決断、その裏側にある葛藤や選択の重さに注目した。さらにご家族を亡くされた関係者の聞き取りを進め、震災から何を学びいかに、後世へ伝えていくかについて考察を深めることにした。

活動計画

○取材対象

- ・井上剛さん 震災当時中浜小学校校長
- ・早坂満さん、由里子さんご夫妻 震災時、娘の薫さんを亡くされた

○行程

【12月14日】

- 9:45 井上剛先生の案内で中浜小学校の避難を現地確認する
- 13:30 常磐山元自動車学校津波犠牲者慰霊碑を訪れる
- 14:00 つばめの杜ひだまりホール
常磐山元自動車学校に通っていた娘を亡くした
早坂さんご夫妻から講話、質疑応答
- 15:30 花釜避難丘公園を訪れる



03 中浜小学校の被災体験

①視察の概要

視察日時：2025年12月14日

視察場所：震災遺構 中浜小学校（宮城県亘理郡山元町）

目的：海岸からわずか300mに位置しながら、児童・教職員・地域住民ら90名全員の命を守り抜いた要因を、事前準備・意思決定・環境整備の観点から考察する。



②中浜小学校の避難の概要

元山元町立中浜小学校は、海岸からわずか300mという、海の至近距離に位置している。宮城県南部に残る唯一の震災遺構であり、平成元年（1989年）の改築時には、既に津波や高潮への対策が施されていた。特筆すべきは、当時の住民たちの強い要望により、敷地全体が約2mかさ上げされていた点である。2013年の閉校を経て、現在は「命を守る判断」の重要性を伝える場となっている。

③3月11日の「5分間」に至るまで

全員生存という結果は、当日の判断だけでなく、日常的な危機管理の積み重ねによって導かれたものである。

- 3月9日の前震とマニュアルの再確認：震災2日前の前震を受け、校長・教頭・教務の3名は即座に避難手順を再確認していた。この時、「津波到達予想時刻」を基準に避難先を柔軟に変更するという共通認識を持っていたことが、11日の迅速な意思決定に直結した。
- 児童への事前周知：前日の段階で「近い将来、大きな津波が来る」と子どもたちに伝えていた。この情報共有が、発災直後のパニックを抑え、冷静な行動を可能にした。
- 住民の要望による2mのかさ上げ：平成元年の校舎改築時、地域住民の間には「この場所は海のすぐそばで危ない。建てるなら地盤を高くしてほしい」という強い意向があった。学校側はこの意向を真摯に受け止め、敷地全体をダンプカー約7,000台分の土砂で約2mかさ上げするという、当時としては異例の対策を講じた。
- 外階段の設置：同時に、住民の緊急避難を想定した外階段も設けられていた。これらは単なる設備ではなく、地域と学校が一体となって「命を守る」という意志を形にしたものであった。

④ マニュアルを越えた「垂直避難」の決断

14時46分の巨大地震発生後、教職員はマニュアルと現実の狭間で究極の選択を迫られた。

- マニュアルの断念：本来の指定避難所である坂元中学校へは徒歩で20分かかる。しかし、テレビの情報では「10mの津波がまもなく到達する」と報じられていた。
- 垂直避難への切り替え：「移動は不可能」と瞬時に判断し、マニュアルにはなかった校舎屋上への垂直避難を決定。本来は立ち入り禁止だった屋上の屋根裏倉庫へ、全児童・教職員・住民ら90名を誘導した。
- 生死を分けたかさ上げ：視察時に確認した通り、津波は2階の天井付近（高さ約10m）まで迫っていた。もし建設当時の住民の要望による「2mのかさ上げ」がなければ、屋上すら飲み込まれていた可能性が高い。地域の先見性が、物理的に命を繋ぎ止めたのである。

⑤ 校舎が語る津波の物理的脅威

校舎の損壊状況を詳細に観察することで、津波の性質を理解することができる。

- 水の逃げ道と損壊の差：校舎南側は2階窓まで浸水したが、北側のホールはガラス窓を津波が突き抜けたことで、建物への直接的な圧力が分散された。対照的に、水が逃げ切れなかった体育館は、南東側の窓枠が2階ごと吹き飛ばされる甚大な被害を受けていた。
- 「物」と「命」の優先順位：校長室で横倒しになった800kgの耐火金庫の痕跡は、水の力を象徴している。「金庫は後で回収できるが、命は一度失えば終わり」という井上さんの言葉は、防災教育の核心である。

⑥ 屋根裏倉庫での生存維持と備えの重要性

救助を待つ間、氷点下の寒さの中で90名の命を繋いだのは、日頃の備蓄と現場の知恵であった。

- 偶然と必然の備蓄：震災のわずか5日前に届いた非常用毛布が、濡れずに体育館に保管されていた。また、当日の給食がカレーライスであったことで、児童はエネルギーを蓄えた状態で夜を越すことができた。
- 精神的ケアの環境：窓のない倉庫内に避難したことで、児童は町が破壊される凄惨な光景を直接見ずに済んだ。これが、極限状態での心理的な安定に寄与した。



(命を繋いだ
非常用毛布)



(津波が突き抜けた北側のホール)

⑦当日の時系列

～地震発生前（3月10日）～

・3月9日にも地震が発生していたことから、避難手順を再確認。また、避難方法・避難先は津波到達予想時刻を基準に判断することも再確認していた。

【3月11日】

14:46 巨大地震発生

14:50 大津波警報（テレビからの情報にて）、屋上避難（避難マニュアルにはなかった）

15:45 津波到達（第1波、2波）

15:50 大津波到達（第3波、4波）→校舎よりも高かった、引き波とぶつかったことで津波が低くなった。

16:07 引き波もおさまる、屋上泊決定（仮設トイレ設置）

【3月12日】

6:00頃 自衛隊大型ヘリが発見

中浜小学校→町営グラウンド→坂本中学校避難所

・避難経路

・校舎の被害状況

校舎南側→2階の窓あたりまで浸水

校舎北側→ホールガラス窓を津波が突き抜けた

体育館南東側→2階の窓枠ごと吹き飛ばされる



⑧中浜小学校視察の総括

今回の視察と事前調査を通じて、以下の4点を教育者としての指針としたい。

- 1.初動の重要性：地震直後の数分間が、命を守る「黄金の時間」である。
- 2.覚悟を持った判断：避難行動に「絶対的な正解」はない。状況を瞬時に判断し、責任を持って貫く覚悟を平時から養う必要がある。
- 3.地域・保護者との連携：学校が地域の避難先であることを踏まえ、避難方針の事前周知を徹底する。
- 4.日常の積み重ね：極限の判断を支えるのは、日常的な訓練とマニュアルのアップデートである。

中浜小学校の事例は、決して「運」ではない。地域の意識、教職員の危機意識、そして「何としても命を守る」という強い意志が結実した結果である。春から担任となる私は、この遺構が発する「静かなる教訓」を胸に、子どもたちが自ら考えて動く防災教育を実践していきたい。



① 視察の目的と背景

- 目的: 組織的な避難判断の遅れが招いた悲劇を深く理解し、未来の教育現場における危機管理と命の守り方を考察する。
- 背景: 2011年3月11日、山元町の常磐山元自動車学校において、送迎バスに乗車していた教習生・職員が犠牲となった。今回は遺族である早坂満さん・由里子さんご夫妻より、18歳で亡くなった長女・薫さんの記憶と、震災後の歩みについて聞き取りを行った。

② 常磐山元自動車学校の避難

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、宮城県亘理郡山元町に所在していた常磐山元自動車学校は、あの大きな津波の被害を受けた。当時、同校では教習が行われており、教習生および教職員が施設内や教習車両にいた。地震発生後、同校では津波警報が発令されていたにもかかわらず、「ここまでは津波は来ないだろう」との判断がなされ、速やかな高台への避難が行われなかった。その結果、教習生（18～19歳）の25名と教職員1名が亡くなるという重大な被害が発生した。

14時46分の大地震が発生した後、同校の教職員は教習再開を検討し、教習生を40分ほど敷地内に待機させていた。同校は過去にも津波の被害を受けた場所であること、そして、津波浸水想定区域内に位置していたため、本来ならば素早い避難が必要であったが、「ここには津波は来ないだろう」という教職員の認識から早期避難の開始が遅れた。しかし、教習生からは「避難しよう」というような声が挙がっていたという。

15時30分頃、同校は地震による停電の影響から教習の打ち切りを決定したが、地震や津波を想定した明確な避難マニュアルが無かったため、送迎車で教習生を家まで送り届ける方針を打ち出した。そこで、約40名の教習生を7台の送迎車に分乗して出発した。そのうち、5台の送迎車が津波に巻き込まれたのだが、4台に乗っていた教習生23名（4号車：11名、5号車：5名、6号車：8名、7号車：3名）が亡くなった。また、路上教習中に教官の判断で学校に戻り、徒歩で帰宅途中であった教習生2名も亡くなっている。

教習生は教官の指示に従う立場であるため、自己判断で避難行動を取ることが難しかったと考える。「避難したい」という思いがあったとしても、勝手に車を離れることができない、指示なしに避難できない、危険を感じても行動ができないという制約が常磐山元自動車学校の被災がこのように大きくなってしまった要因には、「人の判断」と「組織の備え」の問題が大きく挙げられる。地震発生から津波到達までには一定の時間があつたにもかかわらず、その時間を十分に活用できなかった。

もしも「最悪を想定する」視点があったのなら、迅速な避難の必要性を共有することができ、もっと早く避難することができていたのかもしれない。そして、常日頃から常磐山元自動車学校が津波浸水想定区域内にあることを自覚し、防災体制を整え、教習生に指示を待たせない体制ができていたのなら、教習生も「自助」のため行動することができていたのかもしれない。

○震災当日

当時、早坂ご夫妻は3人のお子さんと共に亙理町に住んでいた。地震が起きた日、満さんは地震の影響で普段よりも早く帰宅していた。長女の薫さんは自動車学校に通っており、その日は教習のために出かけていたが、自動車学校には送迎があるため、家族は迎えがあるものだと思っていた。長男が帰宅したタイミングで、薫さんを迎えに行こうと車で沿岸部へ向かったが、途中で道路が津波によって浸水していたため山元町の入口付近で引き返さざるを得なかった。

夕方、余震も続くなかで家族は「みんなで探しに行こう」となり、まだガソリンが残っていた長男の車で山元町役場へ向かった。役場では、当時の被害状況や避難所について教えてもらった。そのなかで助けられた自動車学校の子どもたちが避難している場所があることを教えられた。そして、夜中の2時ごろ、薫さんと同じ送迎バスに乗っていた子どもと対面することができた。その子どもの話から、発災時、自動車学校のある場所は停電しておらず、教習を再開するという話が出ていたこと、教官が「津波なんて来ない」と話していたこと、また教習生の中には避難しなくて大丈夫なのかと不安の声を上げていた人がいたことなど、当時の状況を聞くことができた。その生徒たちは車が津波にのまれた後、車の後部ガラスが割れ、そこから脱出したことで男子生徒3、4人が助かっていたことや、教官の中でも早く避難した人は助かっていたこと、さらに、教習車を使って避難した人たちは細い道を通るなどして逃げ切ることができた人もいたことが分かった。

震災から数日後の17日、薫さんは、自動車学校から500メートルほど山側へ離れた場所で発見された。避難を開始した時刻は3時53分と推定されており、多くの送迎車は学校を出てからわずか1分ほどで津波にのまれていたという。薫さんたちの推定死亡時刻は4時ごろで、死因の多くは溺死だった。

○裁判について

薫さんの行方が分からないまま捜索を続けていた最中、自動車学校から「〇〇様のご遺族へ」と書かれた手紙が届いた。まだ生きていたのかもしれない、きっと助けられると信じて必死に捜していた時期に届いたその手紙は、親の心に強い衝撃を与えたという。手紙の内容は、教習費は全額返金すること、すでに弁護士がついており、自動車学校側に非はない、というものだった。早坂ご夫妻は、この手紙に強い憤りを感じた。

その思いを胸に、裁判へと進むことを決意した。裁判では、原告の誰一人として欠けることはなかった。原告となったのは、25名の教習生の親、合わせて46人である。裁判には5年8か月という長い年月を要した。その過程では、「被災者が被災者を訴えるのか」といった心ない言葉を投げかけられることもあったが、何を言われようとも「やっていくしかない」という覚悟で向き合い続けたという。怒りの行き場が分からず、その感情の矛先が裁判という形になっていた部分もあったと振り返る。そして裁判を通して、自動車学校としてのマニュアルを作っていなければ罪に問われないという現実を知り、強い疑問と理不尽さを感じるようになった。

○捜索している時の様子

当時は、ご家族だけでなく、薫さんの幼馴染や友達も一緒に捜索を行っていたそうだ。どこかで元気であると信じつつも、この瓦礫の下にいるのではないか、といった気持ちであちらこちで捜索、さらに各避難所を巡っていた。

そして、1週間程が経過したある日、満さんが遺体安置所で薫さんと対面することができたそうだ。このことを満さんが由里子さんへ電話で知らせようとしたとき、同行していた兄から「見つかったとは言わず、似たような写真があるからと伝えろ。」と言われたことが印象的だったとお話していた。由里子さんが薫さんと対面したとき、「娘じゃない感じ」がしたそうだ。

○柳田先生との出会い

震災後の出会いとして、ノンフィクション作家の柳田邦男さんのお話があった。彼は今、色々な事件・事故の相談を受けたり、慰霊碑へ行ったり、といった活動をしているそうだ。8月には、柳田先生や、色々な事件・事故を経験した人との交流が行われたそうだ。そして、柳田先生がきっかけで虹色タンポポの代表をしている方にも出会い、交流をされるようになった。虹色タンポポで行われている活動のお手伝いに行く中で、早坂さんが自身の経験を話す機会もできたとお話していた。

○薫さんへの思い

成人式の振り袖姿が楽しみで、将来への期待に胸をふくらませていた。どんな人と結婚するのだろうかと思案し、自分のこれからの人生を思い描くことも多かった。さらに、その先には孫を抱く日が来るのかもしれないと考えていた。



③ 質疑応答

Q.早坂さんたち1人ひとりに対して直接謝罪はあったのか

A.皆無です。5年8か月の和解後、帰りのバスで配られた「この度は申し訳ございませんでした」と書かれた紙1枚だけ。社長や幹部が心から悪いと思っているかは分からない。まだ見つかっていない段階で、社長が「皆さんの家に行って線香つけさせていただきます」と頭を下げた時には、かえって腹立たしく感じた。裁判が始まったからは会社側から謝罪・線香は一切なかった。

Q.薫さんを亡くされてから、悲しい気持ちが和らいだ経験や、心が和らぐコミュニティはあったのか

A.心に寄り添ってくれる方や、同じ境遇で家族を亡くした方との交流が増えていった。地元のNPO法人“虹色たんぼぼ”で行われている「聞き書き」という活動を通して、多くの方と当時のことを泣きながら話して、理解してもらえる中で、少しずつ笑える時間が増えていった。話しをすることで前に進めると感じている。人との出会いが支えになった。

特に、美谷島邦子さん（40年前の8月12日日本航空123便墜落事故でお子さんを亡くされた方）との出会いが大きな転機となった。「いのちの電話」で、何も言わずに私の話を聞いてくださったことが・美谷島さんとの出会いが私たちの笑顔につながる1つのきっかけになっている。

Q.薫さん（娘さん）のお話をもっと聞かせてください

A.3315gで生まれてきてくれたことが本当にうれしかった。特に父親がすごくかわいがっていた。団地で生活していた頃は友達が多く、親友と呼べる女の子と仲良しだった。中学校では卓球部に入り、高校では帰宅部だった。朝がとても弱い子だったので、地元の高校に通い、8時過ぎまで寝ていて、仕方なく学校まで送ることもあった。高校2年生の時に髪を染めたりして、少しやんちゃな面もあった。お小遣いを十分に上げられなかったことは少し後悔している。一緒にファッション関係のお店に入るのが楽しかった（母）。小学3、4年生頃から、父の使ったバスタオルを使わなくなったり、「クソ親父」と言ったりすることもあったが、お小遣いをあげたときに見せてくれた喜んだ笑顔が今も忘れられない（父）。

Q.常磐山元自動車学校にお子さんを通わせていたご遺族の中に、早坂さんのように活動されている方はいるのか。

A.いない。和解状態になってから遺族同士は次第にばらばらになっていった。ただ、代表の寺島さんはロータリークラブ関係のつながりで、全国各地で講演を行ったり、議員活動もされていたりするため、その縁で講演されている。その以外の方々は、ほとんど活動されていない。

Q.娘さんが好きだったことや、将来の夢を教えてください

A.将来の夢は漠然としていたが、就職した会社へ通うために免許取得を目指していた。小さい頃は、ケーキ屋さんやトリマーになりたいと言っていた

Q. 教員を目指す私たちや、震災を知らない子どもたち、あまり深く考えたことの無い人たちに、受け継いでほしいこと、伝えたいことは何か（あさか）

A. 「東日本大震災で家を失い、今ここに住んでいる（人がいる）」という事実を知り、それを子どもたちが意識的受け止め、何かに生かしてくれたらと思う。

家族や家を失った方々の話を直接聞くことが、最も効果があるのではないかと思う。何も経験していない人が話すよりも、実体験に基づく言葉には説得力がある。今日ここで聞いた話を誰かに伝える、知らなかったことを教えるといった活動をしてもらえるとうれしい。このような「聴き取り」の機会を、今後も増やしてもらいたい。

Q. ”虹色たんぼぼ”とどのように出会い、その後どのような心境の変化があったのか

A. 出会いのきっかけは、美谷島さんが3月に来てくれた際、「レンタカーを借りるくらいならお手伝いしますよ」と声をかけたのがきっかけ。その後、ノンフィクション作家の柳田先生が「亙理に知り合いがいる」と言われたことからつながりが広がり、“虹色たんぼぼ”の代表：鳴原さんと出会った。これが2018年のこと。

Q. 薫さんは供養できる状態だったのか

A. 火葬は3月26日、山形県上山市で、夜9時から予約が取れた。甥がインターネットで調べてくれた。自動車学校で知り合ったお友達や知り合いがたくさん来てくれた。その時間帯でも、名取市の方や隣県から火葬をしに来る方々がいた。



④常磐山元自動車学校視察についての総括

早坂さんご夫妻への質疑応答やお話全体を通して私たちは、出来事そのものだけでなく、その後を生き続ける遺族の思いに向き合うことの重要性を強く感じた。震災から14年が経ち、この場所で起こった出来事は、時間の経過とともに社会の記憶から薄れつつあるが、遺族にとっては今なお現在進行形の現実であることが、言葉の一つ一つから伝わってきた。特に印象的であったのは、「忘れられてしまうこと」への深い悲しみである。注目される被災地の陰で語られなくなっていく現状は、遺族にとって出来事が軽視されているように感じられるものであり、その思いは長い年月を経ても消えることなく残り続けていることを知った。

一方で、そうした苦しみの中にあっても、心が救われた経験があったことが語られた。その中でも、1985年に起きた日本航空123便墜落事故の遺族で構成される遺族の会「8・12連絡会」の事務局長である美谷島邦子さんとの出会いは、特に大きな支えとなった出来事であったという。同じように深い悲しみを経験した当事者の言葉や存在は、孤独を和らげ、前を向く力につながったことがうかがえた。また、震災後、近所の方から話しかけられることがなくなったことにも触れられ、「これまでと変わらず普通に接してほしい」という思いを語られた。悲しみの当事者として距離を置かれるのではなく、日常の中で自然に関わることが、心を支える大切な要素になりうることも知れた。

教員を目指す私たちへのメッセージとして、「学校で何かが起こったとき、途中で止められるかもしれないけれども立ち向かい、上にアピールできる先生であってほしい」「一人ひとりの子どもと自分自身の命を大切にしてほしい」といった言葉が印象に残っている。命に向き合う覚悟と責任を持ち、それを子どもたちに伝えていくことを託された言葉として受け止めた。

今回の視察は、学校被災の教訓を整理することではなく、遺族の立場から「どうあってほしかったのか」を知ることが目的として行われた。お話を伺った早坂さんご夫妻は、私たち311ゼミナールの学生が聞き取りを行うことを受け入れ、当時の思いから今現在の思いまでお話して下さり、このような機会が増えてほしいという思いを語られた。私たちにできることは遺族の方と血を通わせ続けることである。

05 山元町視察の総括

命を分けた「想像力」の継承

山元町での視察は、中浜小学校における「全員生存」という希望の記録と、常磐山元自動車学校における「多くの犠牲」という悲痛な記憶、その両面に向き合う時間となった。この対照的な2つの事例から私たちが学ぶべきは、「平時における想像力がいかに生死を分けるか」という点である。

中浜小学校では、地域のかさ上げという過去の決断と、海との距離と時間から、校舎の屋上に避難するという校長先生と教職員の咄嗟の判断が、偶然を必然の救命へと導いた。一方で、常磐山元自動車学校で家族を亡くしたご遺族の言葉から浮き彫りになったのは、「電気が来ているから津波は来ない」と判断し、さらに送迎バスを走らせてしまった判断の危うさと、それによって断ち切られた「日常の幸せ」の重みである。お父様からお小遣いをもらい、笑顔で出かけていったお嬢様の物語は、震災を単なる「過去の数字」ではなく、今も続く「喪失」として私たちに突きつける。

2つの事例の境界線にあったのは、マニュアルの有無ではなく、「もし今、ここに来たら」という状況を自分事として捉える想像力の差であった。私たちはこれから教員になる者が多くいる。そのような中で私たちは今回学んできたことを子ども達に伝えていく役割を担っている。また、それは子どもに伝えるだけでなく、他の教職員や周りの学生にも同じく共有していく必要がある。

今回の経験でいえば自分の住んでいる地域の特徴をよく調べ、日常的な会話の中でも緊急時に備えた話し合いをしておくべきだということである。こういったことが普段からできていれば、有事の際に数秒で判断ができるようになると考える。

また中浜小学校のように震災遺構としてその傷跡が残されている場所には是非足を運んでもらいたい。中浜小学校の校舎内を歩くだけで、津波が校舎に対してどのような流れを作ったのか、どこが一番危険なのかどこにいれば助かるのかということがよくわかる。実際の建物を見ないとそのことに気づくことはできないだろう。何のために震災遺構として私たちに残してくれたのかということをよく考えながら、その目で見て、想像力を養い、共有していきたい。

教職大学院 2年 佐藤駿

今回の視察では避難してきた人を全員助けることができた学校「中浜小学校」について深く学ぶことができた。これまでも震災以降を見てきたことはあったが、全員が助かったという学校を見ることができたのはとても貴重な経験となった。

特に印象的だったのは屋上での避難生活を想像したことと津波の流れを見ることができたことであった。

屋上で実際に避難していた場所を見せてもらったが、そこはコンクリート打ちっぱなしのただの倉庫であり、外気から身を守ることはできるとはいえとても寒く特に3月のあの雪が待っていた日に1日2日過ごせるかといったらとても無理な環境であった。そんな中校長先生の判断のもとこれまで使ってきた学習発表会や運動会の備品を暖を取るための材料として生活していたというのは先生方の素早い判断や団結力がなせるものであったのだなと感じた。

また2階までの校舎を見てみると、吹き抜けになっているところは津波の流れがそのまま直進していき、流れていくというような印象だったが、教室で壁になっているところについてはそこで波の跳ね返りが起こり、波の勢いがそのまま天井まで達していることがわかった。これをみると一番危険なところは壁際であるのだなということやどこに逃げればいいのかということがよくわかった。

学校現場にでたらどこが安全なのかを常に考えて生活していきたいと思うきっかけとなった。

未来づくり教育創生コース 4年 五十嵐真子

今回の視察は、災害時の「学校の在り方」「教員の役割の大きさ」について深く考える機会となり、4月からの教員生活へ決意を強固にするきっかけとなる貴重な時間だった。

震災遺構である「中浜小学校」の視察では、校舎内を巡りながら当時のことについてお話を伺い、当時の避難の様子について知り、学ぶことができた。また、震災当時、子どもたちが一夜を過ごした屋根裏部屋にも入らせていただいた。視察に伺った日は雪が積もりとても寒い日だった。震災当時はもっと寒くて暗かったと思うと、子どもたちはどんなに怖くて不安だったのだろうか。被災の経験がない私にとって、これまでなかなか震災当時のことについて想像しきれていない部分があった。しかし、今回屋根裏部屋に入らせていただき、そのなかで井上先生から当時のお話を伺うことができて、被災の現実を肌で感じることもできたように思った。

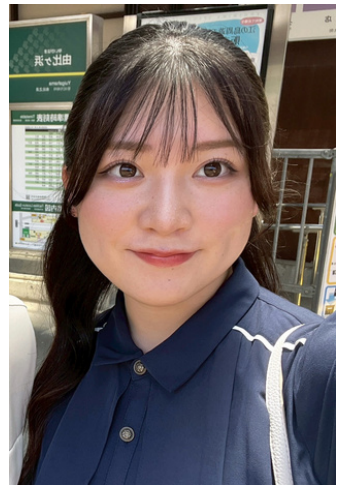
早坂さんご夫妻は、震災当時の出来事についてだけでなく、娘の薫さんとの素敵な思い出についてもお話してくださった。お二人のお話を伺い、「先生には、子どもの命を守る責務があること」「学校は各家庭の「唯一無二のたからもの」をお預かりしてる場所であること」を改めて強く感じた。先生の判断一つひとつが子どもの人生を左右し、災害時は特に一瞬一秒が生死を分ける。子どもたちにとって「先生」の存在はとても大きく、影響力があることを感じた。

「いざというとき、本当に子どもたちの命を守れるのか」という不安は、正直今も払拭することはできていない。しかし、「命を守る」ことを最優先に考え判断・行動すること。当たり前なことだが、このことを徹底し「必ず子どもたちの命を、未来を守る教員になる」と決心した。今回、井上先生・早坂さんご夫妻からお話を伺い、学んだこと感じたことを忘れず、「子どもの命を守るために自分ができること、すべきこと」について考え続け、学び続けていきたい。また、震災を知らない子どもたちへ「命の大切さ」を伝え、この出来事を風化させないように伝え続けていきたいと強く思った。



未来づくり教育創生コース4年 高橋輝良々

今回、震災遺構になった中浜小学校を初めて訪れ、あの場所に遺構として残さなければならなかった意味を肌で感じ、改めて「伝承すること」の大切さを実感した。井上先生は、「校舎そのものが展示物である」ということをおっしゃっており、語り部をする中で津波の威力を建物の被害から詳しく教えてくださった。私は、東日本大震災のとき、町が津波に襲われていく様子を確認することができる山に避難していたが、子どもである私たちを守ってくれようとした大人の存在とあまりの恐怖から津波を見ることはなかった。そのため、津波という存在を知ってはいても、その動きや速さ、威力を本当の意味で知らなかったのだと思う。しかし、今回の井上先生の案内をあの中浜小学校の校舎で聴かせていただいたとき、初めて目の前に津波が現れたような気がした。それは、あの日の出来事を伝え繋げてくれる人の存在、そして、あの場所にあの日と同じように残っている校舎があるからこそ、津波をこの目で見たことのない私にその恐ろしさが伝わったのだと思う。命の大切さや防災について考えることの大切さを、震災遺構という形であの場所に残してもらっている私たちは、そこであった被災と教訓を決して無駄にしなければならないと強く感じた。そのために今を生きることができる私たちは、大切な人たちと共に生きる未来を信じて伝え繋いでいかなければならないのだと思う。



未来づくり教育創生コース2年 大久保奏亮

山元町視察、特に中浜小学校において当時の校長先生から現地で語り部としてお話を伺えたことは、震災の記憶を単なる知識としてではなく、自分の行動の基準として捉え直す貴重な経験でした。視察当日は気温が低く、被災した建物の中で当時の状況を想像しながら見学することで、震災の現実を身体感覚として追体験し、より深く考察することができました。

311ゼミナールでの活動を通して、これまでも震災遺構を訪れる機会はありましたが、実際に遺構の内部に入り、語り部を聞きながら当時の状況を追体験するという経験は初めてであり、震災遺構の存在意義や、被災地に足を運び直接話を聞くことの重要性を強く実感した一日となりました。児童や教員が一夜を明かした屋根裏の雰囲気は、震災から14年が経過した現在もなお張り詰めたままであり、当時、先の見えない不安の中で命の行方すら分からなかった人々の恐怖や苦しさを思うと、胸が締め付けられるような思いがしました。

助かった背景には多くの偶然が重なっていたという話も印象的でありましたが、その経験を決して美談として終わらせてはいけなと感じました。偶然ではなく、必然として命が守られる社会を実現するためには、防災に対する日頃からの意識と備えが不可欠です。今年で東日本大震災から15年が経ち、震災を「知らない」「分からない」「忘れてしまった」世代が今後さらに増えていくことが予想されます。そのような人々の前に教壇に立ち、命を預かる立場になる者として、今回の視察で得た知見や感じた思いを語り継ぎ、自分なりの形で防災教育に取り組んでいきたいです。



理数・自然系教育創生コース2年 西美紗緒

今回の視察は震災の記憶を知識としてだけでなく、自らの行動指針として刻む貴重な経験となった。中浜小学校では遺構として残る校舎の損壊の様子から、震災当時一体どんな状況だったかなど、災害の様子を詳細に読み解き、それらを知識として未来の災害へ生かすことができるという事を学んだ。対策の方法がより具体性を増すものとなり、被災した建物から災害を学ぶという経験は初めてだったが、この経験を通して震災遺構のある意義を強く感じた。生徒たちの震災当時の状況、一夜を明かした屋根裏部屋の様子は実際にその場に立たなければ感じられない程衝撃的なものであった。偶然が重なって助かったと語られてはいたが、その偶然は決して何もせず生まれたものではなく、日頃からの準備や意識があったからこそ生み出されたのだと感じた。町の住人や教員の防災意識、前日の動向など全てが関係し合い命が守られたのである。その偶然を作り出すため自分自身日頃から備えと意識を持ち続けたいと思った。二度と同じ災害はないという言葉に胸に、ここで学んだことを未来の災害に必ず生かしたい。早坂さんご夫妻のお話はどの言葉も忘れられないものばかりで、昨日の事のように娘さんを語るその姿は大変穏やかで温かい笑顔が印象的だった。ご遺族の方や娘さんの思いに触れて想像すると思わず涙が溢れてしまった。被災地実情班に在籍している以上、早坂さんご夫妻の思いを決して風化させることなく未来へ語り継いでいきたいと強く思った。今回得た学びを知識として留めるだけでなく、未来の災害へと繋げるため実際の行動へと移していきたい。



人文・社会系教育創生コース2年 千葉雄翔

今年度、被災地実情班のメインとなる活動は、震災遺構・中浜小学校で語り部をしている井上先生と震災によって娘を亡くされた早坂さんご夫妻からお話を聞くことでした。前者は命が救われたお話で後者は命が救われなかったお話だったこともあり、午前と午後で感情の高低差が非常に大きかったことが心に残っています。

井上先生のお話については、東日本大震災の前震であった地震の発生後に会議や訓練を行い、迅速な対応が命を守ることに繋がったという教員の団結力に驚きました。山元町での前震は比較的弱かった記録が残っているものの、今後の本震を予測した対応が結果的に功を奏したのだと思いました。これは日ごろからの教員間のチームワークや防災の知識があっこそなのではないでしょうか。将来教員を目指す自分にとっては大きな学びとなりました。

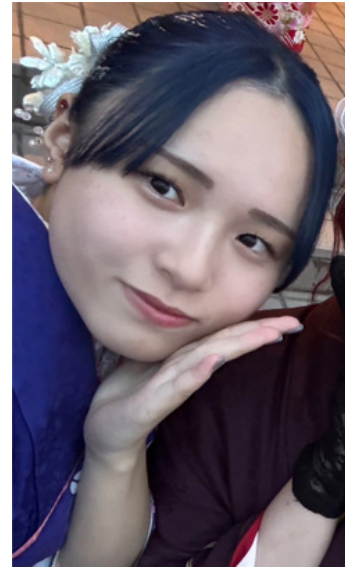
早坂さんのお話については、震災でご家族を亡くされた方から当時の出来事や思いを詳しく聞くことが初めてだったこともあり、心が苦しくなったことを覚えています。震災から15年が目前に迫っていますが「昨日の事のように覚えている」という早坂さんの思いをしっかりと受け止めることができました。この被災を教員として子どもたちに伝えていってほしいという早坂さんのご希望に添えるように、学びを続けていこうと思いました。

今年度も311ゼミの活動を通してまた一步成長できたと感じています。



未来づくり教育創生コース2年 高木那々実

今回の視察では、助かった命と助からなかった命の両方についてお話を聞くことができる非常に貴重な機会だった。中浜小学校では、地域の方から校舎のかさ上げを求める声を取り入れて校舎を建設したこと、当時の校長先生が垂直避難を行うという判断をできたことが、多くの命を守る結果につながったのだと感じ、学習発表会など学校行事の備品を活用するという柔軟な対応が寒さの厳しい状況の中でも子どもたちの命を守ることににつながったのだと思った。非常時はその場の状況に応じた判断を行うことの大切さを実感した。また、早坂さんご夫婦のお話からは、県北の被害が注目されがちである一方で、広く発信されていない地域や個人の中にも、今なお震災の記憶と向き合い続けている人がいることを再確認できた。娘さんがどのような人だったのかを語るお二人の表情はとても穏やかで、今でも大切に思っていることが伝わってきた。しかし同時に、震災は過去の出来事として終わるものではなく、今でも続いているものであり、一生向き合い続けなければならない出来事なのだと感じた。今回の学びを通して、命を守る判断の重さとともに、震災の記憶を風化させず、伝え続けていくことの必要性についても考えさせられた。教員を目指す身として今回学んだことや感じたことを忘れずにこれからも学び続けていきたい。



生活系教育コース(家庭科)2年 築場麻花

今年度の視察において、立場や経験が異なる人のお話を聞いたり、現地を訪れたりして、改めて震災について深く考える機会となった。

まず、中浜小学校についてである。視察は12月に行ったが、冷たい雨風に見舞われ、凍えるような寒さだった。3月の寒空の下、先が見えない不安や様々な感情を抱えながら、屋根裏部屋で過ごしていたということの過酷さを痛感した。校舎に残った震災の面影が痛々しく、当時のことを簡単に想像できてしまうもので、ここでも震災の恐ろしさを痛感した。しかし、それだけではなく、残されたモノの意味を分析して震災について読み解くことの必要性を学んだ。建物の高さの考え方や校舎のかさ上げ等、生きた知識として今後活用されていくべきであると考えた。更に、先生方や地域の方々の行動も今回の結果をもたらした大きな要因であると感じた。震災は、「特別なもの」ではなく「当たり前にかかるもの」という高い危機意識を持ち、準備することの大切さを再確認した。

次に、早川さんのお話についてである。お話を聞く中で、当時の様子や気持ちが伝わり、心が大きく揺さぶられた。また、癒されない傷を抱えながらも、出会った人やコミュニティを大切にしながら力強く生きている姿が大変印象的だった。何度も「昨日のことのよう」と仰っており、震災は決して過去のものではないということを改めて思った。更に、親にとって子どもがどれほど尊くて、かけがえのない存在なのかを考えさせられた。

活動を通して学んだことに何度も立ち返りながら、これから学びを深めていきたい。



未来づくり教育創生コース 2年 福岡加彩

今回の視察では、県北から県南の山元町を訪れ、地域による被害の違いについて学んだ。県南はこれまであまり注目されてこなかった一方で、多くの犠牲者が出ている現状を知り、震災の記憶や教訓をより多くの人に伝えていく必要性を強く感じた。

最初に訪れた中浜小学校は、当時学校にいた児童や教職員、避難してきた住民の方々全員が無事に助かった学校である。被災地の語りでは「偶然」という言葉が用いられることも多いが、中浜小学校では、日頃からの防災意識や教職員間の連携、災害対応を見直し続けてきた姿勢が、結果として多くの命を守ることに繋がったのだと感じた。

次にお話を伺った早坂さんご夫妻は、震災当時の出来事を今も鮮明に語られており、震災が決して過去の出来事ではないことを実感した。また、「学校」や「先生」という存在への固定的な捉え方が、非常時の判断に影響を与える可能性について考えさせられた。将来教員を目指す立場として、子どもが自ら考え行動できる力を育てることの重要性を改めて感じた。

被害の大きさに違いはあっても、どちらの場所も震災を考える上で重要である。今回の学びを、今後の生活や学びに生かしていきたい。



幼年期教育創生コース 2年 千葉奈々子

今回の視察では、訪れたそれぞれの場所から新たなことを学び、思いを知る体験をした。

中浜小学校では、当時校長を務めていた井上先生の「以前は90名が助かった。けれど、次はない。」「東北には空白の時間がある。」という言葉から、過去の成功体験に頼るだけの備えへの危うさを感じた。もし再び大きな災害が起こった場合、垂直避難ではなく内陸へ逃げるなど、その時の状況に応じた判断が必要になると再確認でき、南海トラフ地震を想定している地域の方が、防災教育が進んでいる現状にも気づかされた。「経験しているから大丈夫」と考えるのではなく、新しい防災の情報を取り入れ、普段の生活の中で備えを重ねていくことが大切だと感じた。中浜小学校は、震災の実情を知るだけでなく自分の目で見て考え感じ取ったことを、未来の災害に備えるための知識へと変えていくことを願う場所であった。震災遺構が存在している本当の意味に、より近づくことができた。

次に、早坂さんご夫妻と共に常磐自動車学校の慰霊碑を訪れた。慰霊碑は山下駅からも遠く、目に留まりにくいと聞いていた。この場所で起きたことがあまり知られていないこと、忘れられていることが残念でならないという早坂さんの思いから、注目されにくい被災地があるという現状を実感した。語り部のような活動はされていないというお二人だったが、当時の思いや娘さんとのエピソードを一つ一つ丁寧に語られる姿を見て、震災は過去の出来事ではなく、今も続く現実であることを強く感じた。

山元町視察を通して、自分の中でアップデートしていくべき考えがあることに気づくとともに、これまでお話を聞く機会のなかった立場にいる方の思いを知ることもできた。これからも被災地の実情を知り、被災地と呼ばれるようになった場所で暮らしていた人の思いを受け取り、未来につなげることを大切にしたい。



初等教育専攻1年 中村玲菜

今回視察した中浜小学校は、津波から逃れた「助かった命」を通して、今後の防災について考える貴重な機会となった。被災したご遺族のお話では、娘さんを亡くした当時の貴重なお話を聞き、学校の防災について改めて考えさせられ、震災でのいい出会いについても教えて頂いた充実した時間となった。

小学校の視察時、寒い雨の日であり、震災当時の子供達と教員、地域の人達が感じた肌に突き刺さるような冷たさや状況の過酷さを実際に痛感した。偶然が重なり合って救われた命の背景には、学校の避難訓練の質の高さや、当時の校長先生方の危機管理など事前の準備が何よりも大事だということの特に学んだ。剥き出しになった教室や校舎内に流れ込んだ大きな流木を見て、震災の恐ろしさを痛感すると同時に、私が当時この立場に居たら、小さな子供達を連れて、どんな判断と行動をしたらろうと考えさせられた。

早坂さんご夫妻からのお話では、娘さんとの思い出話を明るく話された時の表情と涙を流す姿を見て、悲しみは計り知れない震災の残酷さを痛感させられた。これから教員となる私達は、震災を知らない子供達にどう教え伝えていくべきなのか考え続けていかなければならないと感じた。震災を通じて素敵な出会いがあったと話す早坂さんは、震災はまだ続いている終わらないものということ強く話されており、私は震災や防災の大切さを確実に伝え、自分の力で考えて強く生きていく子供達を育てたいと感じた。

初等教育専攻1年 佐々木優衣

今回の視察では、今まで被災地を見たことがなかった私にとって、当時の状況を知り、被災地の方々の思いに触れるとても貴重な経験となりました。

中浜小学校の視察では、小学校の中を見たり、井上さんから当時のお話を聞いたりして、本当に偶然が重なったことで助かった命なのだと痛感しました。それでも、実際に助かったのは当時の先生方の対策や、前日に起きた地震の後に情報共有を行ったことが直結していたと感じ、改めて日頃からの備えの大切さを知ることができました。また、教員になった際に、子どもたちが自分自身で命を守れるように私たちがどのように指導・サポートを行うかを考えるきっかけにもなりました。

また、早坂さんご夫妻のお話ではお二人とも明るくお話をされていて、その中にも今を一生懸命生きようという思いが感じられたところが印象に残っています。また、ご夫妻にとって「震災は昨日のことのよう」だとお話しされていて、私たちの中ではもう過去の記憶としての残っているものが、まだ終わっていないことなのだと気づかされました。家族を亡くされた方のお話は、一つひとつの言葉に重みがあり、私自身がこの苦しさや悲しみを伝えていくべきだと感じました。

今回様々な方々にお話を聞き、実際に被災地を自分の目で見たことでさまざまな気づきを得ることができました。この経験を周囲に伝え、今後の活動にも生かしていくことで、さらに学びを深めていきたいと思っています。

